

放送人の会

No.76

2016.11.18

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階 Tel&fax03-3221-0019 Mail info@hosojin.com

発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉 編集担当 伊藤雅浩 (広報委員長・編集長)、鈴木典之、菅野高至、逸見京子、前川英樹 (HP担当)、松尾羊一 事務局 須斎恵美子

記録されなかったものの記録

放送人の会 会長 今野 勉

1. パラリンピックのこと

日韓中テレビ制作者フォーラム北京大会の開会式の挨拶で、私はテレビで見たりオデジャネイロ・パラリンピックの話をした。選手たちの超絶的な技や力にも驚いたが、もつと驚いたのは、1964年の東京オリンピックでもパラリンピックが行われており、それを今回テレビで知らされるまで全く知らなかったことである。

報じられないもの、伝えられないものは存在しないと同一ことになる、とはよく言われることだが、報じないこと、伝えないことは、その存在を歴史から消すことになるのだ、と思うと、マスコミの担い手である者は、その責の重さにたじろぐ。

パラリンピックに対する無為の50数年は取り返しはつかないが、それでも今知ること、記録されなかったものの記録のリストに入れることはできる。歴史とは、記録したものの集積だけではなく、記録しなかったものの集積をも意味するのだと、気を引き締めたい。

私は、開会式の挨拶の最後を「自らに足らざるものを知ることは、新しい文化を創る第一歩だ」と締めくくった。

2. ノルウェー連続テロ事件のこと

実は、開会式でパラリンピックを持ち出

したのは前段がある。リオ・オリンピックのあった今年の夏、私は北海道にいた。その時、地元の新報で「シノドス」という知の交流スペースを主宰する芹沢一也の論文を読んだ。2011年にノルウェーで爆破と銃乱射で77人を殺害した犯人がどのような処遇を受けているかを論じたものだった。

犯人はノルウェーの最高刑である禁錮21年の判決を受け、他の受刑者とは隔離収監されていた。犯人は、生活用、学習用、トレーニング用の三つの部屋を使い、テレビゲームもでき、料理も洗濯も自分でやる設備もある生活をしており、オスロ大学への通信制による入学も許可されていた。にもかかわらず、彼は「隔離収監は人権侵害だ」と訴えた。裁判は彼の訴えを一部認めたのだという。

ノルウェーの人々はこのような判決を支持している、と芹沢は言う。「罪を犯した人は、私たちと何ら変わらない人間である。そして彼らは、刑罰を受けた後、再び社会に帰ってくる。」

爆破と乱射によるテロが起こった後、ノルウェーの市民たちは、街中を花束で埋め尽くしたのだ。「銃弾に対しては花束を、暴力に対しては愛と思いやりを対峙させたのだ」と芹沢は書く。「これはテロや無差別

殺人に対してノルウェーが選択した『戦い方』にほかならない。」

芹沢はこう締めくくっている。「もしブレイビク(注1)犯人の名前を特別扱いし、憎悪や厳罰で応えるならば、それはノルウェーとその理念の敗北を意味する。ノルウェーの裁判所が示した見解(注2)隔離収監の違法性を一部認めたは『中略』テロには決して屈しない』という、その強靱な意志こそを示したものである」(北海道新聞2016年8月13日)

私はたまたま北海道に居たのでこの記事を読むことができた。東京に居たら知ることにはなかったであろう。

3. 記録されなかったもののアーカイブ

暴力、不寛容が横行する今の世界に、ノルウェーのような国が存在するのは奇跡のようなものだ。しかし、奇跡ですら知られないということもある。

「知る」とは、「知らせる(伝える)」とは、どういうことなのか。「知らせない(伝えない)」とはどういうことなのか。

この夏、私の頭は千々に乱れた。そして、北京大会で「自らに足りないものを知る」とは新しい文化を創る第一歩だと思ふ」という言葉をとりあえず発してみた、という次第なのだ。歴史が成熟するというのは、記録されなかったもののアーカイブができるということではないのかな、と今は思ったりもしている。

日韓中テレビ制作者 フォーラム北京大会

今年のフォーラムは当初中国湖南省長沙市が予定されていたが中国の都合で突然変更され、北京市で行われることになった。

開催場所 北京益田影人花園ホテル（北京市懷柔区楊宋鎮懷耿路 中影基地東側）

開催日時 10月21日（金）～25日（火）

大会のテーマ 家庭、青年の感情
大会スケジュール

●21日（金） 参加者 ホテルへチェックイン

16時半～ 組織委員会会議

18時～ 歓迎晩餐会（東方紅宴会場）

●22日（土）

9時～ 開会式、記念写真撮影

歓迎の辞 夏潮・中国文聯副主席

開会の辞 趙化勇・電視芸術家協会主席

各国代表挨拶

中国 張頌・電視芸術家協会副主席

韓国 吳駢鉉・韓国PD連合会会長

日本 今野勉・放送人の会会長

9・40～ 各国放送事情報告

中国 汪文斌・中央テレビ局発展研究センター
主任

日本 長井展光・毎日放送経営戦略室エグゼ
クティブ

韓国 尹忠云・KBSテレビ未来事業部ディ
タル内容事業部P

10・50～ 番組鑑賞と討論

日本のドキュメンタリー

「NHKスペシャル・老人漂流社会」老年破産の現実

制作者 板垣淑子・NHK社会番組部CP

津田恵香・NHK仙台放送局D

高齢者が3000万人を超え、超高齢者社となった日本。とりわけ深刻なのが一人暮らしの高齢者の問題だ。そのおよそ半数が生活保護水準以下の年金収入しかなく、しかもほとんどが生活保護を受けずに暮らしている。貯蓄もなくギリギリの生活を続けてきた高齢者が「老年破産」寸前の状況に追い込まれている。この厳しい現実を密着ルポで描き、どうやって高齢者を支えて行くか、専門家の意見を交えて考える。

12・30～ 昼食（ローマの休日食堂）

14時～ 番組鑑賞と討論

韓国「ドキュメンタリー」

「SBS特集・地獄の韓国」

制作者 崔民哲・SBS制作監督

番組のタイトルは「ヘルチョン」英語のhellと身分・社会の象徴としての「朝鮮」との合成語で「地獄のような韓国」の意味だ。2016年は韓国の若者にとって夢のために頑張った辛い1年だった。大学に受かっても高い学費のために授業をサボってバイトしなくてはいけない。ちよつとでも就職の希望がみえたら「周りより頑張ろう」と誓い、「若いから苦労しろ」という言葉を麻酔剤として努力し、夢を持ち続けた。その答えは冷たく残酷な現実だ。こうした若者の現実をラップのリズムに乗せて描いた。

15・40～ 番組鑑賞と討論

中国「ドキュメンタリー」

「私たちの青春」

制作者 馬志丹・広東省広播電視局監督

鄭耀豪・広東省広播電視局カメラマン・編集者・D

「青年時代」「努力」を切り口に若者を描いたドキュメンタリー。20人の若者の21話。儒学理念を守って社会に貢献する姿、仕事と家庭の両立に苦しむエリート、貧乏に負けず理想を捨てずインテリになった学生など、長年の記録を積み上げていく。

17・30～ 夕食（ローマの休日食堂）

19時～ 番組鑑賞と討論

日本のバラエティー

「熱中コマ世界大戦」

制作者 阿武野勝彦・東海テレビ報道局長

鈴木辰明・東海テレビ報道部長

2年前の横浜大会での作品の続編で、「全日本製造業コマ大戦」は7か国が参加する世界大会へと発展した。前回優勝した「シオン」、独創的なコマで物議を醸した「カジミツ」、世界大会で台風の目となったインドネシアなど、見ている興奮してくる真剣勝負に密着取材した。

●23日（日）

9時～ 観光 万里の長城 慕田峪

12時半～ 昼食 燕喜食堂

14時～ 観光 雁栖湖

16時半～ 番組鑑賞と討論

韓国ドラマ

「太陽の末裔」

制作者 李心福

特戦司令部海外派兵チーム長というエリート軍人と才色兼備の女医との恋愛ドラマ。軍人役がソン・ジュンギ、女医役がソン・ヘギョン、脚本が人気の高いキム・ウンスク。韓国ではもちろん、中国で高い人気のドラマ。日本でもDVDが

売れている。

●24日（月）

8時半～ 番組鑑賞と討論
中国バラエティー

「1年生、大学シーズン」

制作者 徐晴・湖南衛星テレビP・総監督

湖南衛星テレビと上海演劇学院の共同で作られたドキュメンタリー番組で、上海演劇学院大学演技専攻課程1年生の勉強と生活を記録した。大学の文化祭イベントを軸に正規の学生と聴講生との恋物語が描かれている。制作者の説明では脚本はなく、多数のカメラで撮影した事実を編集したものだそう。中国では高い視聴率を獲得した。

10・10～ 番組鑑賞と討論

日本ドラマ

「いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしま

う」

制作者 並木道子・フジテレビD

村瀬健・フジテレビP

（この二人の制作者は今回の大会の突然の日程変更のため参加できず、フォーラム会場の説明は中町綾子・日大教授がつとめた）
幼いころ母を亡くし、引き取られた家で家政婦のようにこき使われながら北海道のさびれた町で暮らしている音（有村架純）、運送会社でへとへとになるまで働いている練（高良健吾）の恋物語。

12時～ 昼食（ローマの休日食堂）

13時半～ 番組鑑賞と討論

韓国バラエティー

「私の小さなテレビ」

制作者 朴真慶・MBC PD

李在石・MBC PD

最近話題トップのユーザー・クリエイト・コンテンツは一人放送だという。尽きない素材があつて、短いけど内容は豊かで、魅力があふれている。年収が1億円に達した映像ウェブサイトの一人放送のスターにプロのシェフ、医師、教師、マジシャン、などが参戦する。

15・10、番組鑑賞と討論

中国ドラマ

「氷と火の青春」

制作者 潘鏡丞・モンゴル生まれの監督
梁振華・脚本家、P、北京師範大学文学
院教授、中国電視芸術家委員

会評論専門委員

15年前金融危機の爆発で会社を乗っ取られ自殺に追い込まれた父を持ち敵の企業に潜り込む高尾、逮捕され破産した父を持つ江森、優しく美しい夏氷、七転び八起きの青春ドラマである。

17時、閉会式

18時半、夕食（ローマの休日食堂）

19時半、自由交流

●25日（月）解散・帰国

【日本側参加者】（順不同、敬称略）

板垣淑子、津田恵香、阿武野勝彦、鈴木辰明、長井展光、音好宏、沈霄虹、渡辺浩平、玄武岩、今野勉、河野尚行、山田尚、田中則宏、前川英樹、吉田賢策、伊藤雅浩、柏木登、隈部紀生、近藤邦勝、鈴木嘉一、牧之瀬恵子、中町綾子

参加者の感想・意見

BEIJINGプール：

東海テレビ・阿武野勝彦

北京市郊外の映画村。名古屋で言うなら明治村のある大山のような位置関係だろうか。カメラを担いだ巨大な犬の人形が玄関を飾る映画村のホテル。そこが、今回のフォーラムの会場だった。一度入ると4日間の缶詰。何せ、北京の中心街まで片道1時間かかるのだから。私は缶詰の「具」として身を崩さないように保たねばと、スーツケースからゴーグル、キャップそして海水パンツを取り出し、初日からプールを目指した。平泳ぎとクロール。毎日500メートルを泳ぎ、プールサイドの温水で身体を温めた。煮詰まらずに過ごせたのはこのプールのお蔭だったのかも知れない。プール付きのホテルに感謝。

さて、今年のフォーラムは参考になった。中国は、CCTVを除いてネットワークがないため、ローカル局が全土に取材班を出しているようだった。例えば湖南省のテレビ局が上海で長期ロケをしていたり、売れる番組の制作に血道を上げているのだ。韓国では、俳優の出演料が高騰し、国内だけでは制作費の回収ができない事態で、中国から予め資金を集めるということになっていた。日韓の政治経済情勢が反映しているように思えた。これを、広域化とか国際化ということもできるが、番組が金銭で絡めとられやすい状況でもある。つまり、制作者が、視聴率やスポンサーを強く意識しすぎ、また番販しやすい作品へ傾斜していくという潮流だ。日本も事情

は多少違うが、そうした構図の中で嘔き、そうしてテレビ番組は、むしろ失速したように私は感じている。高齢社会の到来と同様、日本は中韓より少し先を経験しているのかもしれない。そのせいだろうか、『老人漂流』この恋を思い出してきつと泣いてしまふ』そして私たちの『熱中コマ世界大戦』は、売り物第一主義とは一線を画す番組作りという問題提起だったのではないかと。つまり、私たちは表現の原点を大切にしようとする制作者の志を基調としていたのではない。テレビ制作者とは、何のために存在しているのか、という問いの入り口を通らなくていいのかということだ。そして、私は、金と視聴率の乱痴気騒ぎの、いわば祭のあとと寂しさの中にいる今の日本のテレビ状況を顧みて、『そろそろ気がつくよ。消費されるものばかりではいけないって、さ』と、あの会場で、自戒を込めてちよつと言つてみたくなった。しかし、どうやら、それは中韓のみならずには届かなかつたようだ。なぜって、

通訳が訳せないことは、伝わらないし、それに、今、渦中にいる人々には、そこは、蓋を閉めて突き進む時なのだから。『踊る、アホウに見るアホウ、同じアホウなら』北京のホテルのプール。泳ぎながら幾度も思った。たとえ祭の中でも、そして、たとえ踊ったとしても、それでも冷静な視点で表現を繰り返すことが、私の仕事だ。

貴重な交流

北京空港に降り立ち、目の前に広がったのは

板垣淑子

全く見通しのきかない真つ白な大気。「ああ中国にきたのだなあ」と実感した瞬間だった。同行した後輩ディレクターの津田が「マスクした方がいいですよ」と差し出してくれる。バスに乗りこむと、北京市のイメージとは程遠い高原のような緑の広がる景色を2時間ほど走り、到着したのが、会場となる花園ホテルだった。到着した日は、本場の北京料理に舌鼓をうち、普段、会話をする機会のない大先輩の方々と同じテーブルで食事をするという得がたい体験に緊張しながらあつという間に1日が終わった。

そして、翌朝からいよいよフォーラムのプログラムが始まった。NHKスペシャル「老人漂流社会」老後破産の現実」は、発表作品の一番手だった。会場の空気もつかめぬまま、短い挨拶の後作品の上映となった。中国や韓国のテレビマンたちが、作品をどう見ているのか、気になり、表情からそれを読み取るうとしても、難しい表情でモニターを見つめている顔からは何も読み取れない。

上映後、意見交換の場に移った。韓国のテレビマンは、「韓国でも孤独死は増えているし、老後は貧しいのが当たり前。日本も同じだと知って驚いた。」という意見。日本の老人は豊かだというイメージがあつたのだという。

幾人かと意見交換した後、中国の若い女性でディレクターの質問を受けた。この女性との意見交換はフォーラムを通して一番印象的だった。「なぜ、この老人たちは何の得もないのに取材を受けたのか」という質問。言葉を選びながらも伝わる自信がないままに一生懸命、お年寄りの思いを伝えた。伝えたかった。

「日本の老人たちは、自分たちが役に立たな

いからこそ、迷惑をかけまいと生きているように思う。取材を受けてくれたのは、そんな自分でも必要とされるなら、と覚悟を決めてくれたということ、そんな社会を変えたいという私たちの思いに共鳴してくれたのではないか」

説明を聞いた女性の、その反応が一番うれしかった。

「ラストのシーンでおばあさんが月をながめて『お月さん、ありがとね』という。そのシーンがせつなくて。」

言葉が詰まらせながら意見をくれた。

「老人を大切に思える社会にしなければならぬ。そういう番組を作らなければならないと思いました。」

NHKスペシャルで老人漂流社会をシリーズで伝えてきて、一番思っていることは「お年寄りに優しい社会になって欲しい」ということ、それに尽きる。そのことを文化や背景の全く違う中国の若い女性が感じてくれたことがうれしかった

その女性は、エレベーターの前で偶然、出会った時にも、微笑んで（たぶん英語が話せないからだろうと思うが）、私に向けて小さくピースのサインを送ってきた。通じ合った、という思いは今も心に刻まれている。

そして韓国や中国の作品の上映作品から、大いに刺激を受けた。韓国の作品は「地獄韓国」。スピード感と演出の斬新さに目を奪われた。若者がラップを口ずさむ演出までは、なんとなく「ありそう」だが、その歌詞が日本ではあり得ないほど過激。若者たちの言葉とはいえず、番組中に何度も「地獄韓国」が連呼されることにも驚いた。

そして中国で一番人気というドキュメンタリ

ー番組の上映はさらに度肝を抜いた。ゴールデンタイムに視聴率20%を誇る番組だと聞いて、さぞかし、胸を打つ感動的なドキュメンタリーだと思いきや、真逆だった。

男性を主人公にした「なりあがり物語」で、貧しい男性が失業で妻に捨てられ、息子を育てながら「なりあがり」していく。金銀アークセサリーをジャラジャラ身につけ、とても共感の回路のない主人公。これが中国人にウケるんだ。新鮮な発見だった。ベテラン監督らしい女性ディレクターが「深夜の2時の夫婦ゲンカを撮影するのは大変だった」とエピソードを語った時にも

「そこまでするか」と突っ込みたくなったが、文化の違いがあればこそ、インパクトとギャップを楽しめたのだ、と自分を納得させ、残りの時間も楽しむことができた。

休憩時間、韓国のメディア専門誌の女性記者から取材を受ける機会もあった。やはりテーマは「老後の貧困と孤立について」。家族主義に支配されてきたアジア共通の課題、この場で改めてそれを確認できたことで、次の番組展開も明確に持てたように思う。

日本、中国、韓国—近くて遠い異文化の仲間たちとの刺激的な時間を共有できたこと、このフォーラムに参加させて頂いたことを化心から感謝したい。来年も、再来年も、この貴重な交流の場が続いていくことを祈ってやまない。

久しぶりの北京

柏木登

久しぶりの中国でした。

1989年から90年にかけて、書家の柳田泰

雲氏が中国五岳の一つ山東省泰山に、日本人として初めて摩崖碑を作るというドキュメンタリーを撮りに何度も訪中しました。その縁でその後「漢詩の世界」というシリーズも制作することになり、成都や武漢など各地に足を延ばしました。

早いものです。16年ほど経ちました。久しぶりの北京でしたが、北京空港は大きく立派に変わり昔の面影はありません。今回は空港からさらに郊外方面に向かったホテルでのフォーラム開催でしたので、北京市街を観る事もなく過ぎましたが、ホテルに集う人々の服装や駐車場にある車を見るにつけ、暮らしぶりの大きな変化を実感しました。経済環境・生活環境が大きく変わる中で、テレビ番組・テレビ局の在り様も変わったに違いありません。

今回のフォーラムは、当初の日程がずれ場所が北京に変更になったゆえに、自分も参加可能になったものですが、金曜の午後便で向い、月曜の早朝便で帰京するという弾丸ツアーでした。上映会の1日目、2日目に参加して3日目早朝帰国するという不完全な参加でしたが、中国・韓国の番組をじっくり観て、制作者の考えを聞く、初めての貴重な機会になりました。一つ二つの番組を観ての感想ですが、制作者の発想・手法の違いが興味深く、お国柄なのか属人的なものなのか色々考えさせられました。国や時代のもたらす価値観の影響、制作者自身の生い立ちや生活信条の反映。作り手が選ぶテーマや、選ぶ表現手法には、意識的か無意識的にか様々な起因する源があります。聞いてみたいこと話してみたいことは多くありました。残念だったのは、通訳のクオリティがいまひとつで、微妙なニュア

ンスが全くと言っていいほど伝わりにくかったことでした。議論を深めるには至らない原因でした。

読売新聞の鈴木嘉一さんから「伊藤BAR」にいらつしやいと誘われ、夜毎に、話の輪に入れて頂き、今野さん前川さん達の面白話を聞くことが出来たのは予想外の楽しい時間でした。また、昔々、放送局の枠を超えて酒席(?)で一緒にしたTBSの近藤さんとテレ朝の吉田さんに再会できたのも嬉しい出来事でした。

フォーラム中もオファタイムも、諸先輩の皆さんが実に壮健で、エネルギーッシュで明晰なことに圧倒された日々でもありました。

世話役の皆さまにあらためて心より御礼申し上げます。一文記しました。

コンテンツ・お金・青春

玄武岩

『宮中女官チャングムの誓い』で日本でもファンの多いイ・ヨンエの新作ドラマ『師任堂、色の日記』が、韓国専門チャンネルのKNTVで今年10月より日韓同時放映の予定だったが、同社のホームページで突如延期を告知された。製作元の韓国SBSが来年1月に放映を延期したからである。

この釈然としない放映の延期には中国の影がちらつく。『師任堂』は香港の「映皇娛樂(エンペラー・エンターテインメント)」から10億円の投資を受けて、韓国では緒に着いたばかりの事前製作方式で今年6月に30回分の撮影を終えた。すでに中国には毎回27万ドル(3千万円)の価格で輸出されることが取りざたされ、実際

湖南TVが放映権を獲得して日韓中の同時放映が実現する予定であった。それが、中国での審議が遅延することで、韓国でも放映を見送ることになり、日本にも飛び火したのだ。

なぜ輸出先の中国での放映が立ち遅れることが、製作元の韓国での放映を左右することになったのか。この背景には、近年の韓国のメディア環境において影響力を増している中国の資本と市場の存在がある。今回の日韓中テレビ制作者フォーラム北京大会は、こうした日韓のコンテンツ産業の結びつきと、夏のサード（THAAD）高高度ミサイル防衛システム）の導入をめぐる中韓の緊張のなかで、急遽開催地を変更して開催された。

韓国のドラマ部門の出品作『太陽の末裔』（KBS、2016）は、中国市場を見据えてドラマの事前製作に乗り出し、中国の最大手の動画サイト「爱奇艺（アイチイ）」で日中同時放映され大ヒットした。上映後、中国側の賞金が相次いだことから、同作への高い関心がうかがわれる。同時に、軍隊の海外派兵を背景にしたことによる日本側の見方との温度差も浮き彫りになった。

中国の文化産業の統制が、皮肉にも韓国ドラマ業界の悪しき慣行とされてきた製作環境をあらためる契機にもなったが、質疑応答で同作の制作者がそれを「強制的」と表現したように、韓国では中国資本を導入し、中国での放映を前提に韓国ではドラマが製作される構図には戸惑いもみられる。実際、韓国側参加者との非公式の話合いからは、もはや中国の資本投入がないとドラマ制作は成り立たないという危機感がひしひしと伝わってきた。

一方、「青春」をテーマにした今大会で際立つ

たのが、開催国である中国と日韓とで対比的な青春像だ。社会の矛盾やひずみを表現できない中国にとって青春は「純粋な恋愛」や「逆境の克服」として表象されたが、日本と韓国にとってそれは「絶望」の同義語にほかならなかった。しかしその「絶望」の捉え方も日韓で様ではない。ラップのノリに合わせて語った「ヘル朝鮮」の現実が「絶望的な決起」であったならば、日本の番組は、総じて「絶望的な諦念」だったような気がする。

この相違は、日本の出品作に対する韓国側の反応からすれば、テーマ設定やストーリー展開に起因するよりも、従来の描き方に固執するドキュメンタリーやドラマ制作のスタイルに原因があるようだ。若者の「絶望」を象徴すること流行語となった「ヘル朝鮮」を、軽快なリズムに乗せて既成世代の認識を転覆した韓国の実験的な番組はもつと議論されてもよからう。この手の番組は日本の得意ではあるまいか。

格差社会とインターネット

隈部紀生

テレビ番組はドキュメンタリー、ドラマバラエティのどれも、その時々々の社会の実態を反映する。今回出品された作品でも、韓国のドキュメンタリーは若者の貧困を、日本のドキュメンタリーは高齢者の貧困を強く訴え、中国のドラマは競争社会の哀歓を描いていた。社会体制の違いはあるが儒教思想と現代の市場主義経済がぶつかり合っているのが共通していた。世界的な格差の拡大についてどう取り組むのか、短い番組では解決策を暗示することも難しいが、正確

な状況認識を執拗に提示して行くのはマスメディアの大きな役割であることは間違いない。

一方今大会ではテレビというメディアがインターネットの普及、拡大で大きく揺さぶられていることを切実に感じさせた。3国の冒頭の報告で、中国の代表は「ネットユーザーが5・14億人に達し、テレビはネットに引越すのではなく、ネットユーザー向けに制作することが重要で、すでにモバイルビデオ向けにパンダの生誕を24時間生放送した」と語った。韓国の代表はネットで「スモール・テスト・エプリアホエア」という番組を流し、4000万人がクリックしている」と言い、「私の小テレビ」というウエブ向けの一人のスターによる長時間のジョッキー番組も出品された。

これに対して日本からは、「コリア」なども始まっているが、テレビ番組をネットで流す場合の著作権処理が難しいことが報告され、ネット向けの番組制作では韓中両国に後れを取っていることが感じられた。

今年の大会は第16回だった。私はこれまで半数の8回に参加したが、その間には日韓中の3国の外交関係が緊張した時期もあった。よくここまで続けてこられたと思う。3国の放送人が築いた絆が強かったのは確かだが、今放送メディアの変革期を迎えてインターネットによるコンテンツとの関係など考え直す時期に来たともいえる。今後コンテンツ制作の国際交流の在り方について3国とも議論を進化させる必要があるだろう。

格差社会考

河野尚行

韓国からのドキュメンタリーはSBSの「地獄韓国」。韓国の若者たちの不安と怒りをインターネット中心に描いて見せる。1日に3つもアルバイトに追われる女子大学生、それでも家賃、食費、通信費（スマホ）の支払いで精一杯、学費は借金。学費の個人負担はOECDの中でも韓国は最高レベル。中には1日12時間のアルバイトで大学は休学状態。就職難で100通の書類を書いて内定はもらえず、卒業もできない。若者の失業率は12%、やっと就職しても契約社員、非正規社員は同じ仕事でも給料が極端に安く、休みも取れない。就職難、結婚難、それに子育て難。非正規職位保護法も守ってくれない。88万ウォン世代（月給8万）という言葉があるが、私自身そうなってしまったと青年は訴える。病気の母親と頼りない父親の家族を支える高卒の若者は2年に一度転職を繰り返さねばならない不安を語る。韓国社会は、こういう具合に格差社会がますます広がり、それが世襲化されている。ソウル大学の合格者は名門高校からの卒業生が多くが占められる。インターネットの合間にラップ音楽が入り込む。その歌詞の一つ「君が歩いている時、他人は走っています。君が走っている時、他人は飛んでいます。溪流の小さい鯉が、滝登りをめざすけど、その都度、川に落ちました。滝登りをめざすなら、もつと早く、生まれた時から準備しないとけません」。

中国から帰って録画でNHKスペシャル「マネー・ワールド 資本主義の未来 その(2)」と

(3)を見る。統計資料のビジネス化とスタジ
オ解説、それに海外のトップクス取材と著名人
のインタビュで構成される。国家が企業をコ
ントロール時代から、グローバル時代の大型企
業は、時に進出先の国家を訴える時代になった
こと、アメリカの7人に1人は生活困窮者であ
る一方、一握りの富裕層が政治を動かす、世界の
トップ62人の総資産が世界の低位36億人の総
資産と同じ事など、格差が世界的規模で急激に
広がり始めている現実を伝える。それに伴い排
他主義的ナショナリズムが各地で芽生え、その
一方、社会を安定させるために中間層を増やそ
うとする健全な動きがある事も伝える。現代世
界を俯瞰する一種の文明批評として参考になっ
た。

だが「新映像の世紀」の時も感じたことだが、
なぜ身近な日本の問題を番組の中に入れ込まな
いのか。なぜ日本の問題に絶えず立ち返ろう
とする姿勢がないのか、疑問に思う。日本の非正
規社員や高齢者の貧困などを見つめ、現場を這
いずりまわっているグループとは別のグルー
プの制作なのだろうか。

司会はインテリ芸能人・爆笑問題。何でもこな
す、その才能には感心するが、年収数億円の太田
光が格差問題に投げかけるギャグが全く冴えな
いのが印象的である。

年齢差を痛感した万里の長城

鈴木嘉一

日韓中テレビ制作者フォーラムの内容は『月
刊民放』2017年1月号などで報告するので、
北京滞在中の余談を書きたい。

観光に充てられたフォーラム3日目の10月

23日、初めて万里の長城に行った。3か国のう
ち、韓国の参加者は現役のプロデューサーやデ
イレクターが多く、若い世代が目立つ。局のOB
を中心とする日本勢は、最も平均年齢が高い。韓
国勢に対してだけでなく、日本の参加者にも
年齢差を痛感させられたという笑い話である。

この日は快晴に恵まれた。日曜日のせい、大
気の汚れも少なく、ホテルの部屋から遠く山
並みがくっきり見えた。街路樹のイチョウは鮮
やかに色づき、「北京秋冶」という感じのさわや
かな朝だった。バスで向かったのは、八達嶺など
と並んで名高い慕田峪(ぼでんよく)長城である。
以前訪れたことのある中町綾子・日本大学教授
から「下りる時は、スライダーがお勧めですよ」
と聞かされ、楽しみが増えた。

徒歩と乗り継ぎバスで登り口に着くと、各国
の行動は分かれた。韓国勢が早速、往復1時間の
登山道を歩き始めたのに対し、日本勢の大半は
リフトを選択した。空中のリフトからは全山の
紅葉とともに、日光のいろは坂を思わせるよう
なスライダーの長いコースが見えた。片手で自
撮りをしながら、楽しそうに滑る観光客も目に
入る。

長城に立った。彼方には急峻な山脈が連なる。
「この山々が外敵を阻むのに、これほど途方も
ない長城を造る必要はあったのか」「歴代皇帝は
それだけ匈奴や蒙古を恐れたんだろう。勝手に
感想を言い合った後、みんなでスライダー乗り
場に足を運んだ。

順番待ちの列に並んでいたら、乗り口の係の
中年男がこちらを指差し、険しい表情で大声を
上げた。誰に、何を言っているのかわからなかつ
たが、突然、英語に変わり、「オーバー・ザ・シ

ツクステイ」という単語が聞き取れた。どうや
ら60歳以上はダメらしい。還暦を過ぎた私を含
め、白髪が多い一行の多くは「すこすこ引き返
した。中町さんらの『若手』に加え、私より少
し年下で、髪が黒いBS日テレの柏木登さんら
はスライダーの列にとどまった。

リフトに至る分岐点で日本語の案内板を読む
と、確かに手書きで「60歳以上は不可」と付記
されていた。しかし、英語の表示にはその制限は
なかった。「どういうことだ。年齢差別じゃない
か」「いや、日本人への差別だ」というぼやきが
聞こえてきた。

残念なことに、帰りもリフトだった私たちが
登り口で待っていると、スライダーで下りてき
た連中は一様に「ああ、面白かった」と笑みを浮
かべた。満足そうなその表情が何だか誇らしげ
に見えたのは、「万里の長城から滑る」というス
リルを味わえなかった者のひがみだろうか。

2年目の清算

東海テレビ・鈴木辰明

国境を接した国同士が問題を抱えているのは
世界の常識で、日本・中国・韓国の3か国も多く
の問題を抱えている。『日中韓テレビ制作者フォ
ーラム』はその関係の潤滑油となることが開
催の趣旨だと思いが、2年前に初めて参加させ
ていただいた横浜大会では問題の根深さを実感
させられ、苦い思い出とトラウマとなってボク
の記憶に残っている。

2年前の横浜大会、そこで上映していただい
た『熱中コマ大戦』は、皆さんから望外の笑いと
賛辞を頂戴した。直径2センチの小さなコマで

大の大人が真剣勝負をするさまは、言葉が通じ
なくても伝わる万国共通のバカバカしさや感動
があったのだ。上映後の懇親会でも中韓の方々
から囲まれ、いい気分に舞い上がってしまった。
コマ大戦ほど平和な素材はない、ピンポンの次
はコマ外交だ、などと有頂天の上機嫌でそんな
ことを思ったものである。おだてられると木に
登る性格なので、若干の自画自賛はお許しいた
だきたい。

だが、その上機嫌は、翌日上映された日本のド
ラマをきっかけに一転苦い思い出になってしま
った。ここでボクとときが歴史問題を論じる気
はないが、ドラマの題材が広島原爆を扱って
いたというその一点で、日本側が予想だにしな
かった反応を中韓が示したのだ。結果、2年前の
横浜大会は、終わってみると誰もコマのことな
ど忘れ、ヒロシマの印象だけになってしまっ
た。隣り合った国同士には、傷つけ合わずにい
られないハリネズミのジレンマがあるんだ、と
悟ったものである。

そんな経緯もあったので、今回『熱中コマ世界
大戦』でフォーラムにお招きをいただいたのは
青天の霹靂だった。しかも中国まで。しかも北
京！ 重慶の花粉症のボクは、20年程前に北京
を訪れたとき、煤煙と黄砂で人生最悪の鼻炎に
罹った経験があるのだ。

2年前の苦い思い出とトラウマ、それにPM
2.5への恐怖を抱えつつの北京再訪。必ずしも
気分の高揚しない参加だった。が、フォーラムの
会場兼宿泊所となるホテルに到着したその日の
夜のことだった。ボクがエントランスホールで
エレベーターを待っていると、声をかけてくる
人がいた。

「コマの人ですよね。またお会いしましたね」
にこやかにほほ笑むその声の主は、韓国チームの団長・宗日準さんだった。宗さんは2年前の『熱中コマ大戦』を覚えてくれていた。しかも、ボクのことまで覚えてくれていたのだ。

もちろん、コマなんか世界に平和をもたらすはずがない。国際間の緊張緩和に役立つはずもない。でも、市井の民間レベルなら、「お久しぶり」と握手を交わすくらいの役には立てるような、潤滑油のお役に立てるかもしれない……。そんな希望を感じることができた。フォーラムの継続も、決して平たんな道ばかりではないが大きな意義のあることだと信じていることができた。ボクたちが北京に着いた日とその前日に雨が降ったおかげで、PM2.5が洗い流された北京には、爽やかな風が吹いていた。

3か国の9作品

沈睿虹

私が初めて参加した日韓中テレビ制作者フォーラムが10月21日から25日までの5日間、北京で開かれた。中国の作家、郁達夫の名作『故都之秋』は北京の秋を印象的に描いている。その秋を味わいながら、日韓中の異なるメディア文化を体験することができた。

同フォーラムには日韓中3か国で制作、放送された「テレビドラマ」、「ドキュメンタリー」、「バラエティー」の3分野の作品計9本が出品された。これら3分野はテレビコンテンツを構成する主要な部分であり、3か国それぞれの特徴がある。

まず「ドラマ」の感想から述べたい。日本の「い

つかこの恋を思い出してきつと泣いてしまう」は、アジア各国の視聴者も共感できる微細な描写と演技が光る。中国の「氷と火の青春」は日本の作品とは異なる手法で、現代中国の都市部に暮らす金持ちの若者の生活を描く。同じような題材のドラマは1990年代以降の中国で数多く作られている。韓国の「太陽の末裔」は、韓流恋愛ドラマの通常のパターンとは異なっており、視聴者に新鮮な印象を与える。特に興味深いのは、このドラマが中国の若者からも高い人気を得たことである。

「ドキュメンタリー」の3作品は相違点が明確に感じられた。日本の『老人漂流社会』、老後破産の現実」と韓国の『地獄の韓国』はともに社会の厳しい現実を映像化しており、やや重たい内容ながら、両国の現状をわかりやすく視聴者に伝え、人の心を打つ作品である。一方、中国の国営地方放送局が作った『我々の青春』は、現代中国の一面を描くと同時に、日韓の作品とは異なり、視聴者に希望を与える内容になっている。『バラエティー』は近年、各国で脚光を浴びている。特に、中国と韓国のテレビ業界は数年前から連携して様々な番組を作り、中国では全国で大きな反響を呼んだ。今回のフォーラムで披露された韓国の「私の小さなテレビ」は、テレビとネットという異なるメディアを結んだ、まさに放送と通信が融合する時代の典型的な番組である。

今回のフォーラムに出品された番組は、3か国の代表的なテレビコンテンツであるとは言えないかもしれないが、異なるメディア制度、文化の下で作られた作品とともに関係者が一堂に会し、交流できたことは、大きな意味があると感じ

た。(上智大学短期学部非常勤講師)

インターネット時代のテレビ

NHK津田重喜

今回は、中国・韓国のテレビ制作者の話聞くことができる貴重な機会に参加させていただき、ありがとうございました。

驚いたのは、各国のテレビ制作者の幹部のテレビとインターネットの融合のダイナミズムでした。

中国では、すでに250を超えるインターネットコンテンツのプラットフォームが整備され、視聴者は2.4億人を超えているそうです。パンダ生放送というコンテンツもあるようで、24時間10数台のカメラで、ただただパンダを映しているというものです。画面が10分割されて、ただただパンダが映されているというコンテンツ。人気だそうです。

ドラマでは、1作品にかかる制作費も、億単位になっていて、国をあげて力をいれているコンテンツ開発のスピード感の速さに驚くばかりでした。

韓国では、「1人放送」というコンテンツが人気で、ディレクターが一人でカメラと編集ソフトを持って、世界中を歩き回り、自分で撮影し、その場で編集してネットで放送。制作会社はたった4人だそうです。にもかかわらず、その人気は絶大で韓国の旅行会社からも資金援助を受け成長しているという話でした。

ずいぶん前からインターネットの時代と言われながらも、自分の制作の手法や制作期間、働き方にいたるまであまり変化がなかった分、各国

の動きの速さと規模感に驚きました。

これからの制作現場も大きく変わっていくだろうし、その大きな流れのなかにいるんだというのを強く感じたフォーラムでした。

このフォーラムに参加することになった「NHKスペシャル老人漂流社会 老後破産の現実」ですが、各国ともに、高齢化問題と経済苦には大きな関心があるそうです。これから世界中で、戦後生まれの団塊世代が高齢化していきます。一人暮らしの急増や、家族関係の変化、生活保護世帯の増加など、様々な課題が山積しています。こうしたフォーラムに参加することができ、今後さらに取材・制作に力を入れていこうと思いを新たにしました。

私自身は、いま仙台局で勤務していることもあり、高齢者問題だけでなく、東日本大震災の取材を継続しています。今後も様々なテーマの番組を発信していきたいと思えます。

大変貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました！

学ぶところばかりの4日間

毎日放送 長井展光

実は前からこのフォーラムのことは大変、気にしていました。それは私が編集長役をつとめているTBS系のメール配信の情報紙に、先輩ジャーナリストの方がフォーラムの歩みや現状について記されていたからです。今回、放送とネットとの関係を中心に話しをとお誘いを受けた時に、本来ならば「私のような者がとても、とても……」と申し上げるべきところ、二つ返事

でお引き受けしてしまったのも、実際にどういう中身であるのか、見てみたい、という思いからでした。果たして、私の準備した話しが、参加者の皆様にどれ位お役に立ったかはともかく、学ぶところばかりの、有意義な四日間でした。

「テレビ番組の刷新とインターネットとのかわり」。これは近年、避けて通ることのできない課題です。今回はネットを、放送(番組)を流す手段の一つとしてどう活用していくか、という点と、ネットを番組作りにも利用していくか、の二点について話しました。番組を流す手段としては、若者を中心にネット依存度は非常に高まり、「自分の見たいもの(番組)を、見たい時に、見たいところで、自分のよく使っている機械で」というニーズに応え、それを民間企業として成り立つようになくは、というのが現状です。民放の「見逃し配信」しかり、議論がホットな「同時配信」しかり、業界として取り組みを強めなくてはなりません。「メディア環境の変化に乗り遅れない」という視点も大事ですが、番組作り出身者としては「自分達が一生懸命作ってきたものを、視聴機会を拡げて一人でも多くの人に見てほしい」というのも、正しいモチベーションだと思っています。またフォーラムで上映された韓国ドラマが「韓国での放送+中国でのネット配信」というビジネスモデルで資金を調達し、大作を作るといふ、当世メディア事情を体現していたのも印象的でした。

「ローカル局でも南極から中継ができる、新技術を使い安価に」ネット活用で番組の作り方も変わってきます。ネットで前振りをしてから放送本編に入ったり、番組の詳しい内容をネット経由でスマホ画面に映し出す、ということが自

然に行われるようになりました。また、今回上映された大学生の生活を描いた中国の作品は、何台ものカメラで同時に撮影できるからこそ出来た作りでした。非常に安価かつ高性能な民生品カメラが世に出てきたから実現したもので、これらの民生品カメラの主な用途はネットでの映像配信です。

新機軸を活かした、いろいろな形の番組が登場し、放送でもネットでも流れていく。視聴者にとっては何をしようか選択の幅は広がる訳で、そうすると改めて問われるのは番組のクオリティです。今回、さまざま作品を見て、改めて、「中身が肝心」という思いを強くしました。その中身の向上に資するフォーラムの今後、微力ながらお手伝いできればと感じました。

「日韓中テレビ制作者フォーラム」の意味と難しさ

前川英樹

北京大会が終わった。
今年のフォーラムは、当初予定されていた長沙から北京へと会場が変更になるとともに、日程もずれ込んだ。大会運営そのものは太過なく進行したが、そこに至るまで中国側も大変だったのだろうか、日本の実行委員も参加者も随分往生し、消耗した。

日韓でスタートしたフォーラムに中国が参加して現在の形になったというが、当初の状況を私は知らない。札幌大会から参加するようになった私の受け止め方だが、日本の参加はあくまでも個人意思、個人判断が基本である。「放送人の会」は一般社団法人になる前は全くの任意団

体であり、その基本構造は今も変わっていない。会としての作業は多岐で煩瑣だが、主体は会員個人である。だから、「日韓中」の3ヶ国のフォーラムとはいえ、国単位という発想ではない。この点についていえば、中国はもちろん、韓国とも事情が異なる。

横浜大会で日中戦争の捉え方を巡り議論が紛糾したが、そしてまた日本の制作者たちに論点の認識が曖昧だったことはその通りなのだが、それを個人個人の歴史認識とそれに基づく制作の方法論として提起していくのが私たちの本来のスタンスであるべきだったと思う。そこに向かつての踏み込みが(その時、その場)でできなかったことが残念だった。私たちは、少なくとも私は、韓国、中国のメンバーが国として反応した(と思えたのだが)ことに些かたじろいだのだ。

とはいえ、では私たちは国家と無縁かといえどそうではない。個人と国家の関係を客体化して捉えることでしか制作者の歴史認識は成立しない。

今回の北京大会で同様の問題が発生したわけではない。運営も議論も穏やかに進化した。けれども、毎度思うのだが、各国の制作スタイルは基本的に変わらない。中国は番組審査(規制)という制約の下で、予定調和型のスタンスから抜けれない。制作者の熱意は編集やカメラアングルといったテクニカルなところに傾斜する。韓国は、時に優れた発想で刺戟的ではある。しかし、政治状況に向き合う時の韓国メディアの激しさは参加番組からは見えない。過剰な文字情報と効果音に疲れる。そうしないと韓国では視聴者が離れてしまうのだろうか。身びいきではな

く、柔軟でシャープな番組は日本の作品であり、そこには「見せないことで表現する」という方法がある。それでも歴史認識や原発や沖縄問題を掘り下げた番組の参加は避けられがちである。そうした違いこそ語られるべきだろうが、それが成立しない。

つまり、このフォーラムは何のためのフォーラムか、それが曖昧になっている。その大きな理由の一つが、テレビ制作者としての時代あるいは国家への向き合い方が問われていないからだろう。個のないところに表現はない。

慶州大会の中国の総括スピーチで、「中国では制作上の規制が多すぎるのが問題だ」と自国の状況を厳しく指摘した発言があった。「彼は帰国してから大丈夫だろうか」と私たちは語り合ったのだが、その発言の持つ意味がその後のフォーラムで引き継がれることはなかった。それがこのフォーラムの限界だと思ふ。フォーラムが見直される時期に来ている。

テレビとインターネットのはざままで

牧之瀬恵子

中国北京の日中韓テレビ制作者フォーラムのある夜、セッションの前の空時間を利用して会場を抜け出しタクシーで繁華街へ行った。その帰り道、タクシーの運転手がストリーミングの映像を見ながら運転しているではないか。画面は若い女性が部屋でセクシーポーズで視聴者に話しかけるもの。きつと視聴者は似たようなストリーミングに登場する様々な女性を毎夜見ながら楽しんでるに違いない。そう思った瞬間に、フォーラム冒頭で中国の発表者が解説した

中国デジタルコンテンツの人気ぶりを肌で感じた。中国ではCCTVもインターネット専用番組を放送、パンダのミニ番組などインターネットエンターテイメント番組は急成長たという。

テレビ制作者フォーラムも今年で16回を数えたがこのフォーラムの「テレビ」の定義は果たして何だろう。大辞林第三版によればテレビの定義は「画像を電気信号に変換して送信し、受信側で受信管上に画像として再現するもの。また、その受信装置、送信には有線・無線があり、放送・通信・遠隔監視などに用いられる。」とある。かつて映像が電波で放送されブラウン管に映しだされる時代には、「テレビ」の箱自体が「テレビ」の象徴だった。しかし今、映像は様々なモバイル端末に流れてくる。そもそも「テレビ」の語源 television を見てみると tele はギリシャ語の「遠く」、vision はラテン語の「視界」で、「離れたものが見える」と言ったくらいのもので、あるならば、コンテンツ視聴の方法が多様化した今、私たちがむしろその語源に立ち返り「テレビ」をもっと広い意味でとらえたほうがいいのではないか。そう思っていたところに、フォーラムの休憩中、韓国人の参加者が私のところへ来て「テレビフォーラムはそろそろコンテンツフォーラムにすべきでは？」と主張してきた。

そういえば、「日中韓テレビ制作者フォーラム」のタイトルを韓国語で見ると、韓中日PDフォーラムとは書いてあるがもともと「テレビ」は入っていない。韓国で一般的に「PD」と言えば番組のディレクターだが、広い意味でコンテンツのディレクターでもいいのかもしれない。その韓国では、紹介された「My Little Television」に見られるように、テレビとインタ

ーネットの様々な融合の試みが進み、ネットによるテレビ・ラジオ番組のストリーミング視聴は普通のことだ。

世界的に見ても、インターネットの報道やモバイルジャーナリズムが、多様な視点を伝えるインディペンデントメディアとして注目され、支援するファンドや国際機関も増えた。私もこうした流れの中でネットコンテンツを制作しているが、この活動してみると、「テレビ制作者」がインターネットと従来の「テレビ」をつなぐ様々な役割を担えることに気づく。インターネットは「テレビ」にとってライバルや脅威ではなく多様な表現のツールであり、ビジネスチャンスであり、将来への希望なのだ。

フォーラムは、テレビが東アジアの人をつなぎ相互理解を促進することを目指して行われるであれば、私たちが「テレビ」の定義を柔軟にとらえ、利用し、人々に有益な情報を提供すべきではないか。時代と共に「テレビ」の在り方が変わり、そしてフォーラムにとつての「テレビ」も考える時が来た。そう再確認したフォーラムだった。

大画面の魅力

北京国際空港から車で一時間、案内されたのは映画村ともいえる街だ。撮影に使うのである無人の邸宅や別荘風の建物が並ぶ。その不思議な街の中心ともいえる巨大ホテルで今回のフォーラムは開催された。暗闇に浮かぶ大スクリーン、そこに写し出されるテレビ作品はひときりわ迫力があつた。

吉田賢策

一番印象に残っている作品といえは韓国ドラマ「太陽の末裔」。ひたすら正義をもとめる若き軍人と女医のラブストーリーといったところか。今回フォーラム用に再構成したこともあつたがスケール感あり起伏がある展開で参加者を魅了した。中国用にも検閲を見据えて事前制作してメディア展開し成功を収めた。日本でもCS展開していたようで、女性参加者の中には全話見たいという方もいた。迫力ありドラマティックな展開のドラマはお金を払っても見たいのだろう。

日本から出品した月9「いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしまふ」も会場特に中韓の参加者に極めて好評だった。重いテーマで人間の心の揺れを丁寧に描く作品は少ないし、視聴率は取り難かつたかもしれないが、まさに国境を越えて響く。視聴環境とドラマのことがとりざたされているが、折しも録画率が10月から公式に検出される時代、環境も変わるかもしれない。一方小さなスクリーン、たとえばパソコンやスマホの画面にテレビの電波を発信させ、両者の融合を行う試みも各国から報告され、韓国からは実例も紹介された。日本のAbemaTVのようにウェブ用のコンテンツをテレビ局で日常的に造っていく時代が来つつある。

しかし映画村の会場のせい、大画面に惹かれる。格差社会をテーマにしたドキュメントの数々も大画面と向き合うことにより、より集中してみることができた。また、横浜フォーラムの続編として出品された「熱中コマ世界大戦」は、東京中野の映画館で同じPの手による秀作「ヤクザと憲法」等とともに連続上映されるという。コマとコマがぶつかり合う迫力、職人達の汗が

飛び散るシーンは大画面でより魅力を発揮するであろう。4k8kの時代はこうだったことより可能なのか。

夢物語をひとつ。CSのペイテレビを「放送人の会」が持つ。「放送人の証言」のVを上手く加工し、名ディレクターの名作が流れてゆく。夜遅くグラスを傾けながら、大画面のテレビでその時代に想いを馳せながら家で視聴する。そんな時代は：北京の夢でした。

若者とメディア、そして中国共産党

渡辺浩平

今年の「日韓中テレビ制作者フォーラム」が湖南テレビ主催と聞き、楽しみにしていた。2000年代半ば、湖南衛星テレビが「超級女声（スーパーガール）」をヒットさせ、ネット投票で生まれた李宇春が国民的アイドルになった翌年に長沙に取材に行った。中国の地方テレビ局が衛星チャンネルを開いたのが90年代末のこと、それから各局は独自色を打ち出す。若者娛樂路線をとつた湖南衛星テレビがその地位を不動のものとしたのは、その超級女声からだ。超女により、素人のオーディション番組は中国のテレビ界に雨後のタケノコのように広がっていった。

その後、湖南衛星テレビは地方局としてタンツの視聴率を稼ぎ、「超両強」と言われるようになった。「二超」が湖南、「両強」とは、追隨する二つのテレビ局、江蘇衛星テレビと浙江衛星テレビだ。江蘇は、「非誠勿擾」という日本で言えばかつての「パンチデート」のような男女の出会い番組で視聴率を稼ぎ、浙江は、海外のフォーマットを輸入して「中国好声音」をヒッ

トさせた。

さらに今年の日韓中フォーラムでは、湖南テレビで開催されるテレビグランプリ・金鷹賞にも立ち会えるという。商業化をひた走る中国のテレビ局に、私のような研究者が行っても、おさなりの対応をされるだけ。だが、フォーラムだと、局のエライさんとも話ができて、と期待した。

しかし、残念ながら、湖南行きはキャンセル。韓国サードミサイル配備により、中国のメディアには韓国タレントを締め出す「限韓令」が出されていたが、それが原因なのか。周知の通り、中国では現政権が誕生してから、メディア統制が強化されている。規制は、新聞やテレビのみならず、ネットの微博や微信(WeChat)にも及び、その範囲は、政治社会問題だけでなく、エンターテイメントに広がっていた。中国当局は、若者が韓流を含めたタレントに憧れる風潮に対しても、共産党が説く愛国心を損なうものと憂慮していると聞く。「限韓令」の原因をサードのみに帰することはできない。よって、今回のフォーラム延期も「限韓令」だけが原因ではなさそうだ。

チケットを取り直し北京のフォーラムに参加した。中国からの参加作品には、中国の若者が直面する問題を真正面から取り上げるものはない。格差の比較は難しいが、社会制度が日韓よりも不透明で不明朗な分、若者が直面する問題は深刻だが、現在の若者の置かれた困難な状況のみならず、等身大の姿も描かれていると言いがたかった。フォーラムでの中国側の発言にも、中国の若者の負の側面を語る言葉はなかった。時節柄も強く影響をしているのである。

でも「1年生・大学シーズン(1年級・大学

季)」は面白かった。番組は湖南衛星テレビと

上海戯劇学院が共同で制作したキャンパスドキュメンタリー。学院の演劇専攻1年生の暮らしが描かれる。湖南衛星テレビは、かねてから、この手の「真人秀(リアリティショー)」を得意としているが、制作技術は格段に向上したと私には見えた。出品された作品は、第3回

「頑張れ、新入生歓迎会」。戯劇学院の聴講生による選抜試験に向けたレッスン風景、そこに男女の恋愛がからむ内容だ。新入生歓迎会におけるタレントの卵たちの巧みのパフォーマンスは、大学1年生とは思えないレベルだ。歓迎会ステージのサブライズは、男子学生・万国鵬による女子学生・張予曦への愛の告白だ。当初、同級生や先生が暖かく見守るなか、二人の恋は順調に進むかに見えたが、やがて張予曦は万国鵬を遠ざけるようになり、張は二人の将来を考えて学校を去る、そこで、番組は終わる。

上映後、湖南衛星テレビの制作者は今野勉さんに、「シナリオはない」と答えていたが、出演者の教員がそもそもテレビタレント、細かい演出があつてなりたつていて、これは明らかだ。

上海戯劇学院は、人民共和国建国前に創設された演劇学校。旧仏租界に建つ。そのような歴史ある学校が、湖南衛星テレビと共同で番組をつくる。さらに、学院内の撮影のいくつかの場面に、スポンサーの化粧品会社「水密碼」のロゴが入った備品が配されている。大学が(つまり当局が)このようなメディアとの商業色の強いタイアップを許すところが、中国の面白いところだ。

番組はむろん単なる恋愛ものではない。役者を目指す学生たちの努力とそれを称揚する教

師の言葉が挟み込まれる。創立記念日の国旗掲揚を任されるのは、選抜試験のトップの学生。それを学生は名譽のことと受け止める。中国で言うところの愛国心を鼓舞する「主旋律」が番組に埋め込まれているのである。

上映が終わった後、制作者と昼食をとりながら話をした。湖南テレビの視聴者は25歳以下、だから、当局の湖南への関心はこのほかに強い、と言う。一昨年に起こった香港、台湾での学生運動(雨傘運動とひまわり運動)以降、中国共産党は中国国内の若者の動向に警戒心を抱いている。メディアを通じて、若者にいかに影響力を行使し、中国共産党が考える方向に導くのか、それが極めて重要な問題となつていく。しかし、メディアは競争が激化、生き残りには必死だ。テレビは当局の意向をくみつつ、商業化にひた走る。「1年生・大学季」から、そのような中国のメディアの現在のありようの一端が見えた。でも、湖南に行けなかったのは、重ね重ね残念だった。

大会不参加、お役に立てずの弁

渡辺紀史

皆さんに、会報等を通じ「日韓中フォーラム」の案内を差し上げてきた立場でありながら、渡航直前に緊急入院し、いかにも敵前逃亡のような形で大会不参加となり、大変ご迷惑をかけたしました。改めて皆さんにお詫びします。特に出品にに応じていただいた放送局現場の皆さんには、いろいろ無理なお願いをしてきたこともあり、北京では、お礼かたがた歓談したかったとの強い思いがあつただけに、極めて残念です。

余談ですが、入院の理由は胆管結石による総胆管炎。今年、疲れを感じた時に何回か発症した39度超の発熱は、実は風邪ではなく腹部の炎症の所為との診断、放っておくと、敗血症で死に至ると脅かされ、緊急入院となりました。大会不参加は、育てた我が子を手放すような気分、一時は落ち込みましたが、2週間の入院、2度の手術で半分ほどの石を取り去り、胆汁が普通に通う状態に戻しての退院となりました。

今考えると、もしこの発熱が北京で発症したらどうなつたか、ぞつとします。自分の体がどうなつたか以上に、参加者の皆さんにどれだけ迷惑をおかけしたかわかりません。そう考えると、今回の不参加は不幸中の幸い以上の幸いだったと、改めて運命の神に感謝する気分です。

さて、今年の夏は、今年度大会の準備(冗談ですが、今年度は2回の大会を準備した気分です)とともに、来年の東京大会の準備にも追われました。結果的に、放送局の協力なしで実施することになった、今回の中国の大会に参加する目的の一つは、次回東京大会をどう位置づけするか、今後のフォーラムをどうするのかなど、多くの課題を探ることもありました。今回、不参加となり、自分自身の目で確認することはできませんでしたが、今回の会報誌面における皆さんの大会感想を客観的に分析させていただき、諸先輩たちの助言を得ながら、将来を見据えた東京大会の概要を決めていきたいと思います。今後ともよろしくお願いたします。

最後に、直前のあわただしさの中で十分な引継ぎもなく、大会の現場で尽力いただいた、他の実行委員会の皆さん、事務局担当の皆さんに、重ねてのお詫びとお礼を申し上げます。



晩餐会の料理と飲み物



右上・ホテル入り口
右下・ホテルのそばの映画村
上・ホテルの中に飾られている人形



会場の花園ホテル



各テーブルでの乾杯、歓談、交流



晩餐会会場・東方紅宴会場



前川英樹氏



中国・夏潮氏



河野尚行氏 韓国・柳池烈氏



中国・樂建章氏



韓国・宋日準氏



韓国・呉駢鉉氏



中国・范宋釵氏

大会組織委員各氏



参加の辞 韓国・呉駢鉉氏



参加の辞 日本・今野勉氏



歓迎の辞 中国・張穎氏



韓国・尹忠雲氏



日本・長井展光氏



中国・汪文斌氏

番組鑑賞と討論

老人漂流社会
“老後破産”の現実



崔民哲氏

地獄の韓国



津田恵香氏



板垣淑子氏



鈴木辰明氏



阿武野勝彦氏

熱中コマ戦争世界大戦



馬志丹氏

私たちの青春



潘鏡丞氏

氷と火の青春



李在石氏

私の小さなテレビ



中町綾子氏

いつかこの恋を思いだし
てきつと泣いてしまう



柳池烈氏



河野尚行氏

家
が



樂建章氏

まとめ



音好宏氏

次回東京大会のご案内



表彰式



長城のつなぎ目。この上が見張り台だ



石段はやや不規則で歩きにくい



寒いと聞かされてみんな着込んできた



回転軸のそばの溝に硬く厚いビニールを通して回すハイテクのこま。「コマ世界大戦」の制作者が熱心に見ていた



リフトの切符売り場。凄い込みようだ



側壁の高さは約1,5メートル



これが「滑道」。長いステンレスの溝を滑る



こちらはリフト。60歳以上も乗れる



万里の長城はうねうねと続いている



雁栖湖。多様なレジャーボートで遊んでいる



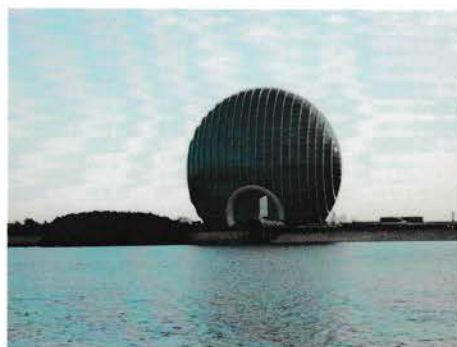
湖畔のAPECのVIPも利用したホテル



昼食は「燕喜」。最高においしい



途中で出会った高架ローカル鉄道



APECにも使われた球形のホテル。総ガラス張り。ガラス拭きはどうするのか?



観光船の船着き場付近。湖畔は大きな柳の並木が並ぶ遊歩道

放送人の会飲み会

参加者（50音順・敬称略）

藍沢幸久、相田洋、天野證範、石橋映理、
 石橋冠、市川哲夫、伊藤雅浩、遠藤利男、
 岡野真紀子、小川治、加藤滋紀、北出晃、
 工藤英博、小池勝次郎、河野尚行、
 近藤邦勝、今野勉、斉明寺以玖子、
 佐々木彰、佐々木光政、佐藤真美子、
 菅野高至、杉田成道、鈴木典之、鈴木嘉一、
 清野豊、高田宏、田中秋夫、鶴橋康夫、
 外崎宏司、戸田桂太、中島由貴、中尾幸男、
 長沼士朗、永田俊和、西川章、信井文夫、
 早川優、深尾隆一、藤田知久、逸見京子、
 堀川とんこう、前川英樹、牧之瀬恵子、
 八木康夫、山崎裕、山崎隆保、山路家子、
 吉村豪介、吉田賢策、渡辺紘史



於・青山莊
11月10日(木)18時



ラジオのページ ラジオと共に半世紀

石原信和

私とラジオとの出会い。それは、50年近く前まで遡ります。当時の若者達の間で巻き起こった深夜放送ブームです。

昭和42年7月31日にTBSラジオ『バックインミュージック』同じ年の10月2日にニッポン放送『オールナイトニッポン』さらに昭和44年6月2日に文化放送『セイヤング』と、在京3局が生放送による深夜放送を次々とスタートさせました。私は、ちょうどその頃、中学生から高校生へと進む時期でした。私の受験勉強は、深夜放送と共にあったと言っても過言ではありません。中学・高校時代、大げさなく、ラジオの深夜放送を聴いていないと、学校で話の輪の中に入ることができませんでした。ですから、必然的に聴き始めるようになり、その面白さにはまり込んでいったのです。兄貴やお姉さんの様な親近感のある語り口、笑わせてくれたり、泣かせてくれたりするリスナーからの投稿、そして最新の音楽。どれを取っても魅力的な番組でした。

齋藤安弘さん、土居まさるさん、落合忠子さん、ナチチャコさん。3局満遍なく聴いていました。その中で、特に好きだったのが、ニッポン放送の高嶋秀武さん。プロ野球シーズンには中継アナを務め、シーズンが終わると、『オールナイトニッポン』に帰ってくるという珍しいパターンのパーソナリティでした。これをラジオのアナウン

サーだな』と思っていました。その結果、『ショウアップナイター』も聴くようになり、自然とニッポン放送ファンになっていきました。

私は、小学校6年生の時に、夏休みの自由研究で読売新聞の見学に行き、それ以来、新聞記者になりたいという漠然とした夢を持っていました。その後、ラジオの深夜放送に触れることで、放送を含めたマスコミへの就職を目指すという人生の目標が大きく膨らんでいったのです。

大学に進学してからもラジオはとにかくよく聴いていましたし、マスコミ志向も変わることはありませんでした。しかし、就職活動はオイルショックを引きずっていた頃で、厳しいものでした。マスコミをあきらめて、一般企業もと考えていた矢先、幸運にも行きたい会社のひとつであったニッポン放送から内定の知らせがありました。昭和51年4月、憧れのニッポン放送の一員となったのです。

入社前、「自分は音楽もやっていないし、番組制作はないだろうな。だったら報道がいいな」と思っていました。そして、配属先決定の日、思い通りに報道部へ。うれしくて飛びあがったのを憶えています。

ラジオの報道は、大手新聞社やテレビキー局の様に、特定の記者クラブに所属して専門的な取材をすることは少ないです。あの時は国会や官邸に、ある時は警視庁や気象庁に、はたまたある時は遊軍記者の様に街ネタの取材にも行きます。毎日、世の中で話題になっている事を中心に身を置くことができ、それは楽しい毎日でした。九

州・福岡で、空前の水不足が起きた時には、現地に取材に行かせていただき、『サンデーマイクジャーナル』という番組で、取材した音楽材を入れながら、20分ひとりでレポートしたのも大きな思い出です。

そして、昭和54年1月、制作部に異動することになりました。まさに青天の霹靂でした。報道部での最後の仕事は、当時の大平正芳首相の伊勢神宮参拝の随行取材でした。それも貴重な経験です。

制作部に移り、初めて『ギュー』を振った番組は、『大入りダイヤルまな背の口』でした。ブロックワイドと呼ばれた番組です。簡単に言えば、録音番組を生放送で繋いでいく番組です。そのパーソナリティが、なんと高嶋秀武さん。この番組では、『高島ヒゲ武』というマイクネームで放送していました。学生の頃、憧れだった方と一緒に仕事をすることができた。そんな運命の不思議を感じたものです。

そして、昭和54年10月、一番の思い出となる番組と出会います。それが、『鶴光のオールナイトニッポン』です。ひとりのリスナーが、大好きだった『オールナイトニッポン』のディレクターになりました。ディレクターといってもパーソナリティによっては、本人主導という番組もある中、鶴光さんの番組は、ディレクターが作り込める部分が多く、大いにやりがいのある番組でした。こんなこともありました。通常、鶴光さんは大阪から新幹線でスタジオ入りします。ある冬の日、関ヶ原付近の大雪で新幹線が大幅に遅れ、放送時間に間に合わないかもしれないという情報がありましたし

た。それはたいへん、私と放送作家のふたりで代わりに番組をやるしかないというところで、編成部長の了解も取りました。ところが、放送開始数分前、「おはよう」の声が、正直がつくり。パーソナリティデビューは幻となったのです。

制作部では、その他様々な番組を担当。『夜のドラマハウス』もそのひとつです。上野修（下野上野・故人）さんという大プロデューサーの下で、ラジオドラマ作りを学び、特番ドラマも6本作らせていただくことができました。

しかし、サラリーマンはつらいもの。その後は、第一営業部、営業促進部、総務部、編成管理部と渡り歩きました。その間、月間スポット7億圓、年間売上400億圓、東証2部上場、お台場移転、有楽町新社屋建設、ライブドア事件など、会社の歴史に残る数々の仕事に関わりました。

平成22年5月、ちよつと早めに退職。その後、放送批評懇談会ラジオ委員を4年間務めさせていただきました。その間、全国のラジオ番組をたくさん聴くことができました。そこで感じたのは、ドキュメンタリーやドラマなど、極めて優れた番組を送り出す制作者がいる一方で、「日常番組の質が低下傾向にあるな」ということです。「ゲストやコメンテーターを多用し、テレビのワイドショーと同じ様な番組が増えてきているな」とも感じます。もちろん番組作りも時代と共に変化していくのは当然ですが、「もつとラジオらしさに立ち返った活気のある番組が聴きたいな」と思う、今日この頃です。 (ニッポン放送OB)

「深夜の解放区」が復活!

「深夜放送まつり」に参加して

田中秋夫

「あの頃深夜放送を通じてパーソナリティとリスナーが一体となり、笑いも喜びも悲しみも孤独も共有した。そしてそこは最新カルチャーの情報発信源として社会現象に。それはまさにラジオだから出来た深夜の革命だった。」

ノンフィクション作家で音楽評論家の田家秀樹は著書「70年代深夜放送伝説」で冒頭の文を書いている。

確かにあの時代、1960年代後半から70年代にかけての深夜放送、TBS「バックインミュージック」、QR「セイ!ヤング」、LF「オールナイトニッポン」の3番組は若者たちの圧倒的な支持を集め「深夜の解放区」と呼ばれていた。

そして今回、「46年ぶりに深夜放送ファンが集まる」との情報を得て、9月22日に幕張メッセのイベントホールで開催された深夜放送祭り「オトナフェス」に出かけてみた。「46年ぶり」とは1970年9月27日に雑誌「深夜放送ファン」が主催し、各局の人気パーソナリティたちが日比谷野外音楽堂に集まった「深夜放送まつり」のことである。そのイベントでは各局のパーソナリティ達がそれぞれの出し物で人気を競い合った。「バック」からは野沢那智、白石冬美他。「オールナイト」からは亀淵昭信、斎藤安弘他。私が担当していた「セイ!ヤング」からは土居まさる、みのもんだ、落合恵子他が参加し

た。

日頃、ライブ関係にある3局がタッグを組んで一堂に集まることは奇跡的なことだった。

あれから46年、その奇跡が再び実現することとなったのだ。

当日、あいにくの雨模様にもかかわらず、当時の深夜放送ファンと思われる中高年をはじめ幅広い年齢層のリスナーが5千人以上集結し、会場は熱気に包まれていた。

開演とともにそれぞれの番組テーマ音楽が会場に響くと観客はヒートアップした。

オープニングは森山、さだまさし、南こうせつ、3人が登場し、ママス&パプスの「夢のカルフォルニア」を歌って会場は一気に60年代の雰囲気包まれた。

その後はナオト・インテライミ、ゴスペラーズのライブで盛り上がった後、泉谷しげる、由紀さおり、森山良子、南こうせつ、さだまさしの順に熱い演奏を繰り広げた。そのステージの合間に小島一慶、白石冬美、吉田照美、斎藤安弘、上柳昌彦他の顔ぶれが当時の話しを展開すると途端に会場は「深夜の解放区」と呼ばれた時代にタイムスリップ。

オープニングで歌った森山、さだ、こうせつ3人は文化放送の音楽番組で大活躍したメンバーだった。

私が制作部に異動した1970年、最初に担当したのが森山良子の「スコッチ・フォークジャンボリー」だった。1967年に「この広い野原いっぱい」でデビューした当時に「フォーク界の女王」と呼ばれていた。そんな彼女は今年デビュー50周年を迎え、ますます元気に活躍しているが、このステージで

「涙そうそう」や「さとうきび畑」等懐かしい曲を歌い大喝采を浴びた。一方、1970年9月に晴海で文化放送が開催したハルミラ・フォークコンテストに応募してきたのが

当時、明治学院大生の南こうせつだった。彼はオリジナル曲「最後の世界」を歌って準グランプリに輝き、その翌年にかぐや姫としてデビューした。私は彼のトークの面白さに注目して1972年に「ハッピー・フォークフェスティバル」の司会にイルカと共に起用した。そして公開録音の為、ネット局のある全国7大都市を共に回った。楽しい旅だった。

一方、さだまさしはグループ時代の1974年10月に相棒の吉田正美(現・政美)と2人で「セイ!ヤング」に起用された。彼は落語研究会の経験を生かした巧みな話術でいきなり深夜の人気者になった。今回のイベントでは彼がトリを務めたが、今も誰もが認めるビッグネームに成長している。

5時間半に及ぶ長時間イベントのフィナーレは出演者全員と参加者が一体となって「翼を下さい」と「上を向いて歩こう」を大合唱となった。

「バック」の出演者として活躍し、今年亡くなったJ・POPのパイオニア・永六輔追悼の意味も込められていた。

今回のイベントには参加していないが当時の深夜放送からは吉田拓郎、中島みゆき、桑田佳祐、長淵剛、小室等、北山修、松山千春、谷村新司、甲斐よしひろ等多くのフォーク・ロック系アーティストたちが巣立って行った。

あの時代の若者文化・特にフォークやロックは「サブカルチャー」や「カウンターカルチャー」と呼ばれ、時代のあだ花的に評されてきた。

テレビやラジオのメインの時間帯は演歌・歌謡曲で占められ、「酒」「港」「涙」「故郷」といった言葉に代表される定型の詞とビブラートを強調した湿ったメロディーが主流の時代だった。

「若者たちは今こそフォークやロックに夢中になっているが、大人になったら演歌を好きになるよ。日本人なんだから・・・」と囁かれていた。

しかし、今回「46年ぶりの深夜放送まつり」を見て、あの頃のフォーク・ロックは今ではより多くの年代層に支えられJ・POPとして立派な「メインカルチャー」に成長していることを再認識することが出来た。

今回ノーベル文学賞を受賞したボブ・ディランの「時代は変わる」を実感したイベントだった。(放送人の会理事)

「ボブ・ディランノーベル文学賞受賞記念特番」時代は変わる」を制作して

延江浩

「いやね、これはめでたいなって思ってた。僕はボブ・ディランが好きなんだ」

「放送人の会」に僕を誘ってくれた浮田周男さんから電話があった。ディランのノーベル文学賞受賞報道の夜だった。「いやいや、それだけなんだけどね」と浮田さんは言うのだけれど、それだけであるはずはない。すると日本文学で東大教授のロバートキャンベルさんからLINEが。

「人間性の結晶として(ディランが)選ばれたと思います。祝受賞特番を作ってください」

「祝受賞特番を作ってください」

「祝受賞特番を作ってください」

「祝受賞特番を作ってください」

「祝受賞特番を作ってください」

い！

「どうして歌手が？」との問いに、スウェーデン・アカデミーはギリシヤ詩人ホメロス
を例に「彼らは演奏されるために詩を書いた。
それはデイルンも同じだ」と答えた。世界中
が受賞ニュースに沸き立っていた。ここはラ
ジオの出番だ。デイルンの楽曲を思う存分か
けられるのだから。

夜10時を過ぎていたが、その場で編成に
連絡してサンデースペシャル特番枠（10月
23日19時〜55分）を確保し、出演をキャ
ンベルさんと小室等さん、構成を浮田さん
にお願いした。その間30分。急いだ訳は、当
のデイルンが沈黙を続けていたから。賞を受
けるのか受けないのか。宙ぶらりんの方が番
組は面白くなる。

浮田さんが考えた番組冒頭はこんな真合句

SE ノーベル文学賞発表の模様／ブレゼ
ンター「偉大なアメリカの歌の伝統の中
で新しい詩的表現を創造してきた」

小室「キャンベルさん、ところでなぜボブ・
デイルンは連絡とれないんですか？」と
いう出だしで番組が始まる。

SE （拍手）1978武道館ライブより
NA 1978年日本武道館。この時、ボブ・
デイルンは最後にこう言って「時代は変
わる」を歌い出した。「15年前に作った
歌だけでも私には重要だしあなた方
にとっても重要でしょう！」

M 「時代は変わる」 1978武道館ライブ
CI「しばらく聞いて BG

NA 僕たちは新しい時代のふちに立って
いる。全く新しい時代の始まりのふちに

全てのものが変わるだろう キミはもう
今までのキミではない キミに用意が出
来てさえいれば すぐにも新しい時代
はやってくるんだ

このオープニングに続く小室等さんとキ
ャンベルさんのデイルン論は愉快で深く、尽
きることはなかった。

フオークシンガのウディ・ガスリーに傾
倒し、ニューヨークで歌い始めたデイルン。
彼の詩の世界、当時の社会環境、受賞理由の
「新たな詩的表現の創造」とはどんなことか。
『風に吹かれて』のように、敢えて答えを出
さないことでリスナーに考えさせるという
スタイルなどなど。

今年のオーチャードホールでデイルンの
ライブを観て、「（彼とは対極にある）シナ
トラのラブソングをカバーしたけれど、それ
は、今こそ『愛』が必要なのだとメッセー
ジに受け取った」と小室さん。

そう、世界の至るところに紛争があり、難
民が増え、格差が広がり、混乱に覆られてい
る。番組ラストで、小室さんが『風に吹かれ
て』を歌い、キャンベルさんはその演奏に「唄
に風景が見えました。こんなことは初めて。
シリアの難民の姿が浮かんで来た」と言葉を
詰まらせた。

放送当時、デイルンが賞受賞を受け入れる
かは不明だった。「もしかしら沈黙を続け
ることでノーベル賞の意味そのものを私達
に考えさせようとしているのかも知れない」
とキャンベルさん。

ネットでは瞬間瞬間に膨大な言葉が飛び
交っている。中には人を傷つける言葉もある。

コミュニケーションのために生まれた言葉
なのに人を追い詰め、人と人の心を離ればな
れにしている。そんな時代に、いや、そん
な時代だからこそ、デイルンは75歳になっ
た今でも旅を続け、毎日のようにステージに
立ち、ネット（架空）ではなく、自らの「肉

第59回放送人句会

平成28年10月5日（水） 於：赤坂・麦屋

出席：伊藤親郎、荻野慶人、中島丈博

新村もとを、西川阿舟、林備後、深尾一化

堀川とんこう（8名）

不在投句：山泉ほん太、佐々木光野

兼題：野菊、吊し柿、身に入む、キュー（業
界用語）

陽の色を貯めて枯らして吊し柿	もとを
吊るされて甘み増すてふ柿あはれ	一化
目じるしの柿すだれ消ゆ祖母の家	慶人
分家ではみんな小ぶりの吊し柿	視郎
平城山の麓に冷気吊し柿	もとを
吊し柿分け出て空の青きこと	ほん太
恋文と野菊の束を貰いけり	視郎
野菊咲く荒れ田の畦や津波あと	光野
野紺菊いつも吹かれてばかりみて	備後
キュー見えず踊り出せない阿波踊	とんこう
身に入むや盛土なき地下抜ける風	一化
蟻にキューを出したらどう動く	慶人
吊し柿一番風呂は兄貴から	備後
吊し柿隣の村の笛の音	とんこう
猿を呼びむささびを呼び吊し柿	備後

声」を私達に届けている。
当初は東京ローカルのみの特番だった。それ
がJFNネット各局の希望で結局は19局で
放送される番組になった。

（FM東京編成制作局プロデューサー）

身に入むや谷間の町にアヴェマリア

とんこう

寝ねぬ夜の障子の影のつるし柿

丈博

人去りし原笈の地に野菊群れ

一化

夢語らふ傍に野菊のありし日々

一化

柿すだれ越しに新妻見え隠れ

慶人

身に入むや即身仏の眼の洞ろ

もとを

身に入むや流木橋を埋めつくす

とんこう

残照の色を止めて吊し柿

備後

吊るし柿人に譬えりや晒首

慶人

うらやましなびて甘き吊るし柿

一化

キュー出しておろる長き夜なりけり

ほん太

ふりちんで泳ぎし岸辺野菊揺れ

丈博

安曇野の夕日の中に野紺菊

もとを

観光のドヤドヤドヤと吊し柿

ほん太

笠句碑の足元に咲く野紺菊

阿舟

星流れ／山湖は波たむ

とんこう

次回放送人句会

平成28年12月14日（水）18時頃から、投
句締切19時▼赤坂・麦屋（投句 Fax:03-3556-
0000）兼題：ねんねこ、鮫鱈、湯冷め、千秋

楽または楽日（業界用語）

楽または楽日（業界用語）

楽または楽日（業界用語）

楽または楽日（業界用語）

楽または楽日（業界用語）

楽または楽日（業界用語）

楽または楽日（業界用語）

楽または楽日（業界用語）

楽または楽日（業界用語）

楽または楽日（業界用語）

第14回 人気番組メモリー

ローカル路線バス乗り継ぎの旅

2007年10月放送中・テレビ東京

日時・10月8日(日) 13時半〜16時

場所・情文ホール

(横浜情報文化センター6階)

ゲスト・

太川陽介(出演) 蛭子能収(出演)

キートン山田(ナレーター)

越山進(制作)

司会・秋元玲奈(テレビ東京アナウンサー)

この番組はいつも明るく冷静、頼れるリーダー太川陽介、おとぼけマイペースの蛭子能収、そして女性ゲスト(マドンナ)の3人が路線バスを乗り継いで目的地を目指す旅番組。移動は原則として路線バスだけ。路線バスがなければ歩く。案内所ではないという路線バスが走っていたり、その日の宿が見つからなかったり、ハプニングだらけの旅が人気である。この日のイベントの応募者は2,000名。「人気番組メモリー」では最も多く、会場は熱気と笑いに満ちていた。

トークショーの冒頭を紹介することで会場の様子を想像して頂きたい。

太川 いつもは僕が仕切っているから今日は蛭子さんにまかせろ。

蛭子 だめだよ。こういうところはまったくわからないので。

太川 大丈夫だよ。リーダーは譲る。

蛭子 いやだよ。リーダーは負担。

秋元 こうやっていつも蛭子さんに逃げら

れているんですね。

太川 そうなんだよ。文句ばかり言って！

キートン 僕はいつも画面を見て喋っているだけでつまらないのですが、今日は皆さんの顔を見ながら喋れるので嬉しいですよ。

秋元 越山さん、太川さん、蛭子さんはロケでいつも一緒ですが、キートンさんと一緒にするのは？

太川 視聴率が良かったときのパーティーのときだけ。最近ちょっとお目にかかっていないので、少しわれわれはがんばらなくちゃ。

キートン 越山さんとは毎回会っています。ダメだしされます。

秋山 えー！

キートン 録音のとき喋ったことがいっぱいカットされます。アドリブで言ったことなど。

太川 あれ、半分以上アドリブでしょう？

越山 そんなことはないです。一応原稿はあります。

太川 全部アドリブだと凄いです。

キートン 二人の行動を見ていると次はこうなると大体読めるから。



太川陽介氏



蛭子能収氏



キートン山田氏



越山進氏



秋元玲奈氏

蛭子 え？何故俺が何か言う間があるんですか？(笑い)それって編集の都合ですか？

越山 ちょっと問題のあることを言ったときです。

太川 ふつうではフォローできないときですね。(笑い)

越山 そうです。

太川 キートンさんの「後半に続く」という台詞は違う番組の台詞みたい。

越山 あれは僕の遊びで、1回に1度は「後半に続く」と言っているんです。

キートン しかもあの声、調子で「後半へ続く」と言われる。(拍手)

太川 ほら、どこかの番組みたい。

秋元 この番組は10年続いて走行距離は1万3千キロ、地球の直径1万2700キロを超えています。

太川 地球の直径を言われてもわからない。地球をぐるっと1周はしていないわけだ。

蛭子 直径ってなに？そこを走ったの？

越山 走っているとき蛭子さんはほとんど寝ていてどこかを飛んでいるから。

太川 直径掛ける3・14で円周だ。

秋元 越山さんは最初この番組がヒットすると思っていましたか？

越山 いやいや、だけど10年続きました。

太川 第1回はふつうの旅番組でした。

蛭子 そうそう。ふつうの旅番組だった。

太川 横浜から富山の氷見まで行った。そのときは台本があった。行くルートが決まっていた。このあたりに泊まる予定というのは僕だけ知らされていた。

蛭子 そうだったの。俺知らなかった。

—総集編1回〜3回上映 第1回はハプニングの連続だった。2回目は目的地京都へゴールならず。3回目は北海道宗谷岬へみことゴール。

太川 凄い！いまとちつとも変っていない。

キートン 匂いが同じだ。

越山 ルールがちよっと違う。

キートン 蛭子さん切れがある。

蛭子 俺この頃若かったなあ。(爆笑) 最近急に年取ったようだ。この頃に戻りたい。

太川 あの頃は蛭子さんもやる気があって、次のバスの時刻を積極的に調べていた。

蛭子 いま、全くやる気がない。(笑い)

—以下略—

会員名簿

2016.11.18 現在

【あ】 藍澤幸久 相田洋 相本芳彦 青木裕子 秋田和典 秋山豊寛 天野證範 雨宮望 新井和子 【い】 池田正之 石井彰 石井ふく子 石橋映里 石橋健司 石橋冠 石原信和 磯智明 磯野恭子 市岡康子 市川哲夫 市村元 一色伸夫 伊藤雅浩 井上佳子 井上良介 今井義典 岩澤敏 岩瀬 弥永子 【う】 上田洋一 上村忠 浮田周男 碓井広義 臼杵敬子 内山洋道 宇野昭 【え】 江川雄一 江口展之 榎本恒幸 遠藤利男 遠藤ふき子 遠藤雅充 【お】 大池雅光 大川光行 大蔵雄之助 太多亮 太田昌宏 大野秀樹 大原れいこ 岡弘道吉 緒方陽一 岡野真紀子 岡本勉 小川治 小河原正巳 沖野暉 荻野慶人 尾田晶子 織田晃之祐 【か】 加賀美幸子 各務孝 柏木登 片岡敬司 勝部領樹 葛城哲郎 加藤滋紀 加藤拓 加藤義人 金澤宏次 金沢敏子 金子登起世 金平茂紀 加納孝夫 川平朝清 鎌内啓子 亀谷弘美 鴨下信一 川喜田尚 川口健一 河邑厚徳 河村正一 【き】 北川泰三 北川信 北川祐美香 北出晃 北村美憲 北村充史 木村成忠 【く】 工藤英博 久保志穂 隈部紀生 倉内均 訓覇圭 黒崎博 黒沢淳 【こ】 小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 後藤和晃 小林和男 小山紳人 近藤一男 近藤邦勝 近藤晋 今野勉 【さ】 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 酒井美樹男 寒河江正 坂元良江 桜井均 桜井元 佐々木彰 佐々木欽三 佐々木光政 笹山正勝 佐藤敦 佐藤幹夫 佐野有利 澤田隆治 【し】 重延浩 重村一 重盛政史 静永純一 志津木敬 四宮康雅 柴田陽一郎 嶋田親一 清水誠 志村一隆 下崎寛 下重暎子 白井博 【す】 菅野高至 菅野嘉則 杉田成道 鈴木昭典 鈴木俊樹 鈴木典之 鈴木弘貴 鈴木嘉一 須磨章 【せ】 清野豊 関佳史 せんぼんよしこ 【そ】 曾根英二 【た】 高島秀之 高田宏 鷹森泉 竹中一夫 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中則広 田原茂行 【ち】 崔銀姫 【つ】 塚原あゆ子 塚本茂 塚本幹夫 辻本昌平 土屋敏男 つポイノリオ 露木茂 鶴橋康夫 【て】 寺島高幸 【と】 東城祐司 堂本暎子 戸田桂太 外崎宏司 豊原隆太郎 【な】 中尾幸男 中込卓也 中崎清榮 中島僚 中島由貴 中田美知子 永田浩三 永田俊和 長沼士朗 永野敏一 中町綾子 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村美美子 中山和記 並木章 【に】 新村もとを 西憲彦 西村与志木 西川章 仁田豊文 仁藤雅夫 二宮文彦 【の】 信井文夫 延江浩 【は】 萩原豊 橋本潔 林健嗣 林安二 原由美子 原田令嗣 【ひ】 玄武岩 【ふ】 深尾隆一 藤井チズ子 藤井正博 藤久ミネ 藤村忠寿 【へ】 逸見京子 【ほ】 星田良子 堀川とんこう 【ま】 前川英樹 牧之瀬恵子 増山麗央 松尾羊一 松平定知 松前洋一 黛りんたろう 【み】 三上義智 水上毅 水野憲一 南譲 三原治 三村景一 三村千鶴 宮崎洋 宮川謙一 三宅恭次 【む】 村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】 本木敦子 諸橋毅一 門奈昌彦 【や】 八木康夫 矢口久雄 矢島良彰 藪内広之 山鹿達也 山県昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】 横山英治 吉澤保 吉田賢策 吉村豪介 吉村直樹 【わ】 若松央樹 和崎信哉 渡辺浩平 渡辺紘史

【賛助会員】 日本民間放送連盟 TBSメディア総合研究所 融合研究所 日本ケーブルテレビ連盟

追悼 吉永春子さん

11月4日 脳出血で死去 享年85
吉永春子さんでは路上追跡シーンをよく見かけた。相手は元関東軍防疫班(731部隊)の石井四郎だ。国際法違反の人体実験の真相をつきとめるドキュメンタリーだ。マルタとよばれた生存者にマイクをつきつけたり、「お春さん、やってるな」。

早朝15分白木屋提供の帯番組「ラジオ・スケッチ」では右翼の大ボス田中清玄から資金提供をうけた全学連幹部の島成郎や唐牛健太郎(歪んだ青春 全学連の闘士たち)やら松川事件など硬派のお春さんとして「鍛冶橋クラブ」(都庁記者クラブ)でも群を抜いていた。旧TBSビル前の地下にあった寿司屋でよく飲んだっけ。夕刊の訃報で失った知人を偲ぶ今日このごろである。

松尾生

編集後記▼日韓中制作者フォーラムの日本側参加者のほとんどの方から原稿をいただいた。多様な内容の文章のおかげでほほ大会の様子がわかる特集になった。寄稿してくださった皆さんありがとうございます▼会場が長沙から北京に突然変更されたことについて、大会で中国からの謝罪はなく釈明らしい釈明もなかった。突然の変更のため大会の準備は大変だったようで特に、翻訳、通訳の手配は不十分だ▼朝昼晩食事したホテルの食堂は中国語で「羅馬假日珈琲庁」(原文は簡体字)だが翻訳されて「ロマンの休みカフェバー」とある。会場は映画村の中にあり、この食堂は映画にちなんで名づけられた「ローマの休日の間」のは

ずだ。こんな翻訳が会場で上映された番組の字幕にも多かったようで、意味がわからなくて困った▼カメラのバッテリーチャージャーを万里の長城観光の途中で紛失し、大会の後半は撮影できず、隈部さんの高性能スマホでの撮影に頼ることになった。助かりました▼伊藤バーは毎晩盛況でした▼放送人の会・飲み会も盛況。ここでの写真の半分は逸見京子さんのご主人、藤田知久さんの撮影です。(視報)

公開セミナーのご案内

第42回「名作の舞台裏」

ありがとう

日時 12月3日(土)

午後3時〜5時半

(いつもより遅くなっています)

場所 情文ホール

(横浜情報文化センター6階)

ゲスト

水前寺清子(出演)

永山藍子(出演)

石井ふく子(制作)

司会 八木康夫(放送人の会)

「ありがとう」は1970年〜75年、TBSで木曜夜8時から放送された人気番組で、民放ドラマ史上最高視聴率56.3%を記録した。水前寺清子が第1シリーズで婦人警官、第2シリーズで看護婦、第3シリーズで魚屋の看板娘を演じたと言え、誰もが思い出す番組でしょう。

会員で参加ご希望の方は事務局へご連絡

ください。